ダニエル書3章 「神々に仕えない僕たち」

1A 金の像への拝礼 1－7

1B 全身金の像 1

2B 諸国民に対する要求 2－6

2A 王の命令に背く者たち 8－18

1B カルデア人の中傷 8－12

2B 神のみへの従順 13－18

3A 火の中におられる神 19－30

1B 第四の方 19－27

2B 王の賛美 28－30

本文

ダニエル書 3 章を開いてください。私たちは前回、ダニエルがネブカドネツァルの夢を伝え、また解き明かしたので、それで彼が高い位に着き、王宮で務めるようにされました。そしてダニエルの願いによって、友人たちはバビロン州の行政をつかさどらせるように、王がさせたことが書かれていました。ここから 3 章が始まります。

ダニエルの友人三人、ハナンヤ、ミシャエル、アザルヤが、大きな試練を受けます。私たちが世において、その証しのゆえ高い地位につくことがあるでしょう。それは、自分がしっかりと世において主に仕えたゆえに、そうなることがあります。これは、主にあって喜ぶべきことです。さらに、影響力のある地位についているのですから、キリストの証し人として人々に影響を与えることができます。けれども、同時にそこにはさらなる試練もあるということを意味します。ハリウッドの世界で働く、クリスチャンの映画俳優の方が、「それは、獅子の穴に投げ込まれるようなものだ」と言ったのを思い出します。6 章に出てくる、ダニエルが獅子の穴に投げ込まれる経験を取り上げたのですが、その通りです。世において昇進したり、高く上げられることは、さらなる霊の戦いが激しくなることを意味しています。

1A 金の像への拝礼 1－7

1B 全身金の像 1

1 ネブカドネツァル王は金の像を造った。その高さは六十キュビト、その幅は六キュビトであった。彼はこれをバビロン州のドラの平野に建てた。

時は、ネブカドネツァルの治世の半ばであろうと考えられます。2 章は、治世の第二年で、始まった時のことでした。そこからしばらく時を経っています。バビロンの都の郊外にあるドラの平地に、

バビロンにいる行政をつかさどる人々と、諸州にいる高官たちを集めて、これから、ここにある金の像を拝ませます。

前回、私たちは王が夢を見たところを読みましたが、それは彼がこれからどうやって治めればよいのかを思い巡らしたのだと思われます。それで主が彼に自分の心にあるものが何であるかを知るためものですと、ダニエルが言ったのでしょう。そして今、王にとって必要なことをしています。これだけの広大な領域を支配しており、そこにはかつて独立していた国々があり、諸民族がいます。したがって、権力を自分自身に集中させないといけません。自分に対して忠誠心を示すために、このような儀礼を行わせました。

しかし、彼は金の像を造らせたことに注目してください。治世の始めに彼が見た夢には、人の像がありました。確かにバビロンは金でありましたが、その下は銀の胸と両腕であり、バビロンは他の国に取って代わることが示されていました。また、人手によらず切り出された石こそが、大きな山となり、神の国こそが永遠に立つことを表していました。王が立つのも倒れるのも、主が行なわれることであり、神こそが永遠に支配される王の王であることが示されていました。

しかし、彼は全身、金の像を造ったのです。「バビロンは決して倒れない。その力と栄華は永久に続く。」と考えたのでしょう。神のみこころに意図的に反することを行ったのです。主は彼に、ダニエルの友人三人を通して、決してそうではないことを示されます。三人は、まことの王はネブカドネツァルではなくキリストであり、永遠に続くのはバビロンの力と栄光ではなく、神の国なのだということを示すために用いられるのです。

この金の像は、非常に不気味です。ネブカドネツァルの行ったことは、実に終わりの日の反キリストを写し出しているようです。高さが 60 キュビトとありますが、一キュビトは肘から指先までの長さです。45 センチとしますと 27 メートルです。幅 6 キュビトは 2.7 メートルです。

この寸法、六十キュビトと六キュビトですが、六は人間を表す数字です。七は完全数で神ご自身を表します。だから七日目の安息、七日間の祭り、七つの教会など「七」が登場します。六は、それに満たない数字ということで、人間を示し、人間中心的な考えを示しています。ソロモン王の時に出てきます。「Ⅰ列王 10:14 一年間にソロモンのところに入って来た金の重さは、金の目方で六百六十六タラントであった。」私たちは、聖書通読の学びでソロモンの統治が、いつの間にか世的になり、神の知恵による栄華のはずだったのが、人間の栄光が混じり合っていたことを話しました。ここでも、天の神によって建てられたのに、ネブカドネツァルは自分こそが、自分の国こそが力と栄光を持っているとしたのです。

ソロモンの治世の時と同じ六百六十六という数字が、あの反キリスト、獣を表す数字としても登

場します。「その数字は人間をさしているからである。その数字は六百六十六である。（黙示13:18）」反キリストは、キリストに似せて世界を治めますが、キリストと神を冒涜し反対する者の数字です。したがってネブカドネツァルのしていることは、自分自身に栄光を付け、それを人々に強要する目的でこの金の像を造っている人間の国であり、終わりの日の反キリストの国の予め示している姿であります。「黙示 13:15 それから、その獣の像に息を吹き込んで、獣の像がものを言うことさえできるようにし、また、その像を拝まない者たちをみな殺すようにした。」

2B 諸国民に対する要求 2－6

2 そして、ネブカドネツァル王は人を遣わして、太守、長官、総督、参議官、財務官、司法官、保安官、および諸州のすべての高官を召集し、ネブカドネツァル王が建てた像の奉献式に出席させることにした。3 そこで太守、長官、総督、参議官、財務官、司法官、保安官、および諸州のすべての高官は、ネブカドネツァル王が建てた像の奉献式に集まり、ネブカドネツァルが建てた像の前に立った。

ここに出てくる数多くの行政官の名称は、おそらくより高い地位からその下にいる人々まで、ということだともいます。太守が最も地位が高く、その下に長官、というように。最後に保安官が来ています。そしてバビロンの中央政府だけでなく、地方の諸州の高官も召集しています。

4 伝令官は力強く叫んだ。「諸民族、諸国民、諸言語の者たちよ。あなたがたはこう命じられている。5 あなたがたが角笛、二管の笛、竪琴、三角琴、ハープ、風笛、および、もろもろの楽器の音を聞いたときは、ひれ伏して、ネブカドネツァル王が建てた金の像を拝め。

いろいろな楽器による、美しい音色が奏でられた上での一斉の拝礼です。「諸民族、諸国民、諸言語の者たちよ。」と呼びかけられているのが、あることに重なります。それは、天における神への礼拝です。天において、神を礼拝している時に、人々の歌声の他に、竪琴の音色もあります（14:2）。そして、主を礼拝しているのは、世界の諸々の民です。「黙7:9-10 その後、私は見た。すると見よ。すべての国民、部族、民族、言語から、だれも数えきれないほどの大勢の群衆が御座の前と子羊の前に立ち、白い衣を身にまとい、手になつめ椰子の枝を持っていた。10 彼らは大声で叫んだ。「救いは、御座に着いておられる私たちの神と、子羊にある。」」しかし、伝令官の叫んでいるのは、まことの天の神ではなく、金の像だったのです。金の像の前で拝礼することによって、バビロンの神々をあがめ、王に忠誠を誓います。

このようにして、人々はまことの神から偶像礼拝へと移っていきます。表向きは似ています。そのやり方は似ています。けれども、対象が変わっているのです。偶像礼拝は身近にあります。一見、同じように見えるのですが、その中身が大きく違うのです。キリスト者でさえ、教会でさえ、表向きは霊的に見えても、いつの間にか自分の思い、イメージで作り上げた神、またイエスを拝んで

いることもあり得るのです。みことばによって、また自分の心が神の前にへりくだっていることによって、初めてまことの神を礼拝できます。

6 ひれ伏して拝まない者はだれでも、即刻、火の燃える炉に投げ込まれる。

この拝礼には、強制力が働いています。政治力が働いています。そして同調圧力も、働きます。つまり、これだけの美しく奏でた音楽の中で、みなが一斉に拝礼している中で、自分だけが主体的に、自律的に、他の行動を取ることは許されないからです。

私たち日本人、アジアの人間は、どこに忠誠を誓うのか？をとても大切にします。西洋人でしたら、個人主義がありますから、自分がしたいことを行いますが、アジア、非西欧は自分がどこに属しているかということが、とても大切にされます。つまり、ここではバビロンに属しているのか、王ネブカドネツァルに属しているのか、それとも、神の国に属しているのかが問われているのです。私たちは、いろいろなところでそれが問われています。職場において、社会生活において、家庭において、いろいろあります。そこで、いつも、自分が神に属していて、神の国に属しているということを知らないといけません。

2A 王の命令に背く者たち 8－18

1B カルデア人の中傷 8－12

8 このため、この機会に、あるカルデア人たちが進み出て、ユダヤ人たちを中傷して言った。9 彼らはネブカドネツァル王に告げた。「王よ、永遠に生きられますように。10 王よ。王は『角笛、二管の笛、竪琴、三角琴、ハープ、風笛、および、もろもろの楽器の音を聞く者は、すべてひれ伏して金の像を拝め。11 ひれ伏して拝まない者はだれでも、火の燃える炉の中へ投げ込め』と命令されました。12 あなたがバビロン州の行政をつかさどらせた何人かのユダヤ人がおります。シャデラク、メシャク、アベデ・ネゴです。王よ。この者たちはあなたを無視して、あなたの神々に仕えず、お建てになった金の像を拝みもいたしません。」

ここにある「中傷して」という言葉は、ここの直訳は、「食いちぎる」であります。その人の肉を食いちぎるという意味です。中傷というものがいかに人を傷つけるのかを、よく言い表しています。言葉による罪は、キリスト者の間でさえ軽視されがちです。淫行であるとか、偶像礼拝、盗みであるならば、どれだけ人に害を与えているか心に痛みをともないますが、言葉についてはそれほど罪悪感を持たない。しかし、ヤコブが手紙の中でいかに罪深いかをこのように表現しています。「3:6 舌は火です。不義の世界です。舌は私たちの諸器官の中にあってからだ全体を汚し、人生の車輪を燃やして、ゲヘナの火によって焼かれます。」この罪をキリスト者とて、免れていないことも指摘しています。「3:9-10 私たちは、舌で、主であり父である方をほめたたえ、同じ舌で、神の似姿に造られた人間を呪います。10 同じ口から賛美と呪いが出て来るのです。私の兄弟たち、そのよう

なことが、あってはなりません。」

中傷しているのは、「カルデア人」です。バビロンの元来の民族です。それが、ユダヤ人がと強調しています。2 章においては、カルデア人たちが王の夢を伝えることができないことが書かれていました、そして、ユダヤ人たちが都のあるバビロン州において高い位について、良い働きをしているので、妬みによって中傷しています。彼ら、ユダヤ人の背後におられる神、その神の選びに対して反感、妬んでいると言ってよいです。エステル記においても、ハマンにひれ伏さなかったモルデカイの姿があります。ハマンはユダヤ民族の撲滅を願いました。

そして、ユダヤ人と同じように、その信仰と神の選びを受け継いでいるキリスト者も、悪者扱いされることを、主ご自身が山上の説教で教えられましたし、使徒たちも教えました。「Ⅰペテ 2:12 異邦人の中にあって立派にふるまいなさい。そうすれば、彼らがあなたがたを悪人呼ばわりしていても、あなたがたの立派な行いを目にして、神の訪れの日に神をあがめるようになります。」しばしば、自分が迫害を受けたらどうするのだろうか？ということを心配する声が聞こえるのですが、それより心配すべきは、「自分は、迫害されるほどしっかり証しを立てているのだろうか？」ということです。世において、キリスト者としての証しを、しっかり立てているからこそ、そこにおられるキリストの光に耐えられなくて、それで妬み、迫害するのです。

2B 神のみへの従順 13－18

13 ネブカドネツァルは怒り狂い、シャデラク、メシャク、アベデ・ネゴを連れて来るように命じた。それでこの三人は王の前に連れて来られた。14 ネブカドネツァルは彼らに対して言った。「シャデラク、メシャク、アベデ・ネゴよ。おまえたちは私の神々に仕えず、また私が建てた金の像を拝みもしないというが、本当か。15 今、もしおまえたちが、角笛、二管の笛、竪琴、三角琴、ハープ、風笛、および、もろもろの楽器の音を聞いたとき、ひれ伏して、私が造った像を拝むなら、それでよい。しかし、もし拝まないなら、おまえたちは、即刻、火の燃える炉の中に投げ込まれる。どの神が、私の手からおまえたちを救い出せるだろうか。」

ネブカドネツァルは怒り狂いました。「おまえたちは私の神々に仕えず、また私が建てた金の像を拝みもしない」と言っていますが、これはバビロンの神々に対する拝礼です。そして、そのことによって王に忠誠を誓います。

王は即座に彼らを処刑してもよかったのですが、これまでのバビロン州における事務の実績があったのでしょう、最後に機会を与えました。「ひれ伏して、私が造った像を拝むなら、それでよい。」と言っています。つまり、「心が伴わなくてよい、形だけでよいのだ。」ということです。政治的な忠誠を誓わせるだけですから、心は必要ないのです。これが迫害するとき、妥協を迫る時の常です。このことをキリスト者はしばしば、間違いをしてしまいます。「そうだ、行ないではなくて心が大事。

行ないに注目するのは、律法主義。」という理屈で、受け入れてしまうのです。心がともなっていなければ、これを行っても構わないとします。そういう問題ではありません。私たちの信仰はもちろん、心の中のことです。しかし、その信仰は行ないとして現れます。行ないと信仰を切り離してよい、とするところに間違いがあります。ここで大事なのは、次のイエス様の言葉です。「マタイ 10:32-33 ですから、だれでも人々の前でわたしを認めるなら、わたしも、天におられるわたしの父の前でその人を認めます。33 しかし、人々の前でわたしを知らないと言う者は、わたしも、天におられるわたしの父の前で、その人を知らないと言います。」

そして、「どの神が、私の手からおまえたちを救い出せるだろうか。」と言っています。つまり、どんな神も、この私、ネブカドネツァル王の手から救い出せる神はいない、と言っています。かつては、ダニエルが示した夢とその解き明かしにおいて、この神がとてつもない知恵を持っているということを王は認めました。けれども、まさか燃える火の炉から彼らを救い出すことなどできるものなのか？という疑問を投げかけているのです。

16 シャデラク、メシャク、アベデ・ネゴは王に答えた。「ネブカドネツァル王よ、このことについて、私たちはお答えする必要はありません。17 もし、そうなれば、私たちが仕える神は、火の燃える炉から私たちを救い出すことができます。王よ、あなたの手からでも救い出します。18しかし、たとえそうでなくても、王よ、ご承知ください。私たちはあなたの神々には仕えず、あなたが建てた金の像を拝むこともしません。」

非常に大切な三人による告白です。私たちは、主に仕えているからこそ、王にも仕え、従っているダニエルの姿を見てきました。「ロマ 13:1 人はみな、上に立つ権威に従うべきです。神によらない権威はなく、存在している権威はすべて、神によって立てられているからです。」と使徒パウロは言いました。そして、「Ｉペテ 2:13-14 人が立てたすべての制度に、主のゆえに従いなさい。それが主権者である王であっても、14 あるいは、悪を行う者を罰して善を行う者をほめるために、王から遣わされた総督であっても、従いなさい。」とペテロは言っています。敬い、従うというのがキリスト者の特徴です。

しかし、パウロもペテロも、「神が権威を与えられた」「主のゆえに従いなさい」と、神に従い、主に従うがゆえに、権威にも従うということを教えています。神に従うことを妨げる、神に背くことを権威ある者が命じる時は、その時は神に従うことを、恐れかしこみつつ選び取らなければいけません。ペテロが、一切、イエスの名によって語るなと命じられた時に、「使 5:29 人に従うより、神に従うべきです。」と返答しました。大事なのは、ここで三人は、燃える火の炉に甘んじて投げ入れられることを受け入れていることです。神に従うのですが、そのためにもたらされる結果についても、しっかりと受け止めてこそ、相手を敬うことができます。

この三人は、「私たちはお答えする必要はありません。」と言いました。2章において、「夢を知らせてください、そうすれば解き明かしてごらんにいれます。」とカルデア人の知者が言ったとき、ネブカデネザルは「2:8 私には、はっきり分かっている。おまえたちは私の言うことが絶対であると分かっているので、時をかせごうとしているのだ。」と言いました。けれども三人は、「そんなことは私たちはしません、言い訳がましいことを言ってこの場を逃れるつもりはありません」と言っています。

そして、「私たちが仕える神は、火の燃える炉から私たちを救い出すことができます。」と言いました。2章においては、天の神がいかに知恵と秘密を知らせることにおいて秀でていたかをダニエルが証ししました。3章においては、「力」において自分たちの神がもっと偉大だということを証ししています。神がそれを御心としておられるなら、神にできないことは何一つありません。「エペソ 3:20 どうか、私たちのうちに働く御力によって、私たちが願うところ、思うところのすべてをはるかに超えて行うことのできる方に」「ピリピ 4:13 私を強くしてくださる方によって、私はどんなことでもできるのです。」救うことができる力を神が持っておられます。

私たちに足りないのは、迫害に耐える力がないということではありません。困難や迫害が来た時に、神が助ける能力を持っているという信頼が足りないのが問題なのです。耐えられるのか、耐えられないか、という想定や予測を立てていること自体が、自分の力で何とかしようとする試みであり、その時点で信仰ではなく恐れが入っています。主が行なってくださるのだから、大丈夫。主の能力を見つめるのです。

「[18] しかし、たとえそうでなくても、王よ、ご承知ください。私たちはあなたの神々には仕えず、あなたが建てた金の像を拝むこともしません。」と三人は言っています。彼らは神の主権を信頼していました。神が救ってくださると信じているのに、あれ？ここでは、信じていないように見えるのだけれども？と疑問を抱かれたのであれば、それは神のご性質を誤解しています。主は、命を救うことも、また命を取られることも、どちらもすることのできるお方であります。ですから、主が御心ならば、必ず救われます。主が自分の命を取るとお決めになっているのであれば、燃える火の炉の中で燃やされることもあるのです。主にすべてをお任せするのです。「Ｉペテ 4:19 ですから、神のみこころにより苦しみにあっている人たちは、善を行いつつ、真実な創造者に自分のたましいをゆだねなさい。」

私たちは、「自分で想定する範囲外において、神が働いておられる。」といういう勘違いをしてしまいます。自分が神は能力があるから、これこれをするはずだと私たちは想定しています。その期待が外れると、神に力がないのか？という疑問を抱くのですが、それは間違いです。なぜなら、それは自分の理解の中で、「神はこのようなことをするはずだ」と思っているだけで、神は自分の思いをはるかに超えて、私たちの願いをかなえられるからです。

3A　火の中におられる神　19－30

1B　第四の方　19－27

19 すると、ネブカドネツァルは怒りに満ち、シャデラク、メシャク、アベデ・ネゴに対する顔つきが変わった。彼は炉を普通より七倍熱くするように命じた。20 また彼の軍隊の中の特に力の強い者たちに、シャデラク、メシャク、アベデ・ネゴを縛って、火の燃える炉に投げ込むように命じた。21 三人は、上着や下着やかぶり物の衣服を着たまま縛られ、火の燃える炉の中に投げ込まれた。22 王の命令が急であり、炉が非常に熱かったので、その炎はシャデラク、メシャク、アベデ・ネゴを持ち上げた者たちを焼き殺した。23 この三人、シャデラク、メシャク、アベデ・ネゴは、縛られたままで、火の燃える炉の中に落ちて行った。

燃えさかる火の試練です。ペテロは、「Ⅰペテ 4:12 愛する者たち。あなたがたを試みるためにあなたがたの間で燃えさかる試練を、何か思いがけないことが起こったかのように、不審に思ってはいけません。」と言いました。つまり、ダニエルの友人三人が通ったこの試練は世の常のものだ、ということです。心の準備をしていなさい、主にあって覚悟しなさいということです。イエス様は、弟子になるためには、費用の計算をしなさいと言われました。「ルカ 14:28-30 あなたがたのうちに、塔を建てようとするとき、まず座って、完成させるのに十分な金があるかどうか、費用を計算しない人がいるでしょうか。29 計算しないと、土台を据えただけで完成できず、見ていた人たちはみなその人を嘲って、30『この人は建て始めたのに、完成できなかった』と言うでしょう。」

三人が、「私たちが仕える神は、火の燃える炉から私たちを救い出すことができます。」と言いましたが、それに王は応じています。彼の持っている、ありったけの力を、燃える火の炉に注いでいます。炉の熱を七倍にせよと命じ、軍隊の力強い者たちに彼らを縛らせ、しかも普通囚人は服を、刑を受ける前に剥ぎ取られますが、そんな時間も与えることなく衣服を着たまま縛らせました。そして炉まで連れて来た者たちが火炎で焼き殺されてしまいました。これが権力です。

24 そのとき、ネブカドネツァル王は驚いて急に立ち上がり、顧問たちに尋ねた。「われわれは三人の者を縛って火の中に投げ込んだのではなかったか。」彼らは王に答えた。「王様、そのとおりでございます。」25 すると王は言った。「だが、私には、火の中を縄を解かれて歩いている四人の者が見える。しかも彼らは何の害も受けていない。第四の者の姿は神々の子のようだ。」

驚くことが起こりました。イザヤは、バビロン捕囚の民のことを考えてこう前もって預言していました。「43:2 あなたが水の中を過ぎるときも、わたしは、あなたとともにいる。川を渡るときも、あなたは押し流されず、火の中を歩いても、あなたは焼かれず、炎はあなたに燃えつかない。」これが文字通り成就しました。主が共におられました。それで害を受けることはありませんでした。ヘブル書 11 章 34 節には、信仰者が「火の勢いを消し」とあります。ダニエル友人三人のことです。

そして第四の者をネブカデネザルは「神々の子のようだ」と言い表しています。彼は異教徒ですから、「神」ではなく「神々」と表現したわけですが、まさに「神の子のようだ」と言ったのです。つまり、私たちの主イエス・キリストご自身です。ベツレヘムでマリヤから、聖霊によってお生まれになる前に、旧約時代にもイエス様は現われてくださいました。

このように、どんな試練の中にも、イエス様が共にいてくださいます。嵐の時に主が弟子たちの舟に乗ってくださったように、私たちと一緒にいてくださいます。私たちは、試練から免れることができるという約束は与えられていません。試練は通ることを教えられています。けれども、試練の中にいて主が共におられるという約束を下さっています。

26 それから、ネブカドネツァルは火の燃える炉の口に近づいて言った。「シャデラク、メシャク、アベデ・ネゴ、いと高き神のしもべたちよ、出て来なさい。」そこで、シャデラク、メシャク、アベデ・ネゴは
火の中から出た。27 太守、長官、総督、王の顧問たちが集まり、三人を見たが、火は彼らのからだ
に及んでおらず、髪の毛も焦げず、上着も以前と変わらず、火の臭いも彼らに移っていなかった。

ネブカデネザルは、彼らの神を「いと高き神」と呼んでいます。ダニエルが呼んでいた「天の神」です。バビロンの神々とは違い、最も高い玉座に着いておられる方です。 王だけでなく、数多い臣下たちもこの奇跡の証人となりました。先ほど、上着ごと縛ったその衣服が、主が共におられたことの証しとなっています。全然焦げていませんでした。

2B 王の賛美 28－30

28 ネブカドネツァルは言った。「ほむべきかな、シャデラク、メシャク、アベデ・ネゴの神。神は御使
いを送って、このしもべたちを救い出された。王の命令に背いて、自分たちのからだを差し出して
も神に信頼し、自分たちの神のほかはどんな神にも仕えず、また拝まないこの者たちを。

ネブカドネツァルは、彼らが王である自分の命令に背くまでして、自分の神に信頼したことを称賛しています。自分の神々に仕えなかったことを称賛しています。周りの機嫌を伺って、調節し、妥協する姿は、後に不信者の人たちからも侮られます。一貫性がないからです。たとえ不信者の人たちの気分を害することをしても、私たちの行動に一貫性があるならば、それを認めるのです。

29 それゆえ、私は命令する。諸民族、諸国民、諸言語の者のうち、シャデラク、メシャク、アベデ・ネ
ゴの神に対して不敬なことを口にする者はだれでも、八つ裂きにされ、その家はごみの山とされる。
このように救い出すことのできる神は、ほかにないからだ。」

対応がずいぶん極端です。彼の信じる神々においては、謙遜や柔和という言葉はありません。強制が働いているだけです。ネブカデネザルは、まことの神、主のことを「シャデラク、メシャク、ア

ベデ・ネゴの神」と呼んでいることに注目してください。数ある神々の中で彼らの神を認めているにしか過ぎません。まだ、「私の神」にはなっていないのです。自分の主にするには、心が砕かれなければいけません。

30 それから王は、シャデラク、メシャク、アベデ・ネゴをバビロン州で栄えさせた。

このようにして、王はダニエルだけでなく、友人三人も栄えさせました。しかし、彼らが証ししている神を彼自身が受け入れるまでには時間がかかります。彼自身の身に何かが起こらない限り、そのことは難しいのかもしれません。4 章で、そのことが起こり、彼が天の神を自分の神とします。

三人のすばらしい証しを読むことができましたが、この3章でダニエルが全然出てこなかったことに気づいてください。もちろん、彼が他の人々と共に金の像の前でひれ伏したとは到底考えられません。答えとなるヒントは、2章の最後の節にあります。「しかしダニエルは王の宮廷にとどまった。」王の宮廷にいたということ自体が、奉献式に参席しなくてもよい理由だったのではないかと思われます。バビロン全州の役人たちを、奉献式に召集をかけたのは、自分の権力に服従されるという王の意図があったと思われます。けれどもダニエルは、その必要もありませんでした。王にあまりにも近い所にいました。権力への服従を試す必要もなかった、と考えられます。

初めに、3章は預言的な意味も含むことをお話しました。反キリストが自分の像を造り、それを拝むように強要する姿を表していることをお話しました。それを拝まないけれども、生き残って神の国にまで入ることのできる人々を、黙示録7章と 14 章が描いています。自分たちの額に神の印を押された 14 万 4 千人のイスラエル人たちです。獣の国の中で、像を拝まない者たちが殺されていくのに、彼らは子羊がシオンの山に立っているところで賛美を捧げています。主イエス・キリストが地上に再臨されたところに彼らがいるのです。大患難の中を、害を受けないで生き残ったのです。

けれども、獣の国の中で、獣が「13:6 神の御名と神の幕屋、また天に住む者たちを冒瀆した。」とあります。この天に住む者たちとは誰なのか？黙示録5章と 19 章に出てくる、教会の姿です。教会はすでに天に引き上げられており、獣の国の中にいなくてもよいのです。つまり、ダニエルが奉献式の場にいなかったことによって像を拝まなかったように、教会も地上にいないことによって獣の像を拝むことがないと言うことができます。ダニエルは教会の型であり、友人三人は、神に忠実なイスラエル人たちの型です。